

トランスアメリカ

2006(平成18)年7月12日鑑賞(松竹試写室)



監督・脚本=ダンカン・タッカー/出演=フェリシティ・ハフマン/ケヴィン・セガーズ/フィオヌラ・フラナガン/エリザベス・ペーニャ/キャリー・プレストン/パート・ヤング/グレアム・グリーン (松竹配給/2005年アメリカ映画/103分)

……主人公の「女性になるための性別適合手術を受ける直前の男性」とともに、NY から LA への大陸横断=トランスアメリカの旅に出る17歳の若者は、実は彼(彼女?)の息子。以降、この2人それぞれの両親(継父)たちを巻き込んだテンヤワンヤのストーリーが展開されるが、終わってみるとオカマやトランスセクシャルをテーマとした、不思議な心温まる物語に仕上がっている。『ブローックバック・マウンテン』(05年)のアン・リー監督が、アカデミー賞監督賞を受賞したのに続き、アメリカでは今年も「この手」の映画が有力……?

主人公は男、それとも女……?

この映画の冒頭は、ある人物が手鏡に向かって口を大きくあけながら「あー」と声を出し、発声練習をしているシーン。その声は甲高い女性の声から野太い男性の声まで大きく変わるが、それはさまざまな発声方法の訓練によって可能になるらしい……。そんなシーンの中、字幕が流れ終わると、やおら彼女(彼)は念入りに化粧を始め、服装を整え、帽子を被ってさっそうと1人家の外へ。顔はちょっと男っぽいものの、その姿は全体としては完全な女。そんな主人公ブリー(フェリシティ・ハフマン)は、男それとも女……?

ブリーの望みは……?

LAで独りアパートに住み、レストランの皿洗いとテレフォン・アポインターの仕事をやりながら慎ましく生活しているブリーは、若い頃から男性であること

に違和感を持ち、今は女性として生きており、肉体的にも女性になるための最後の手術を目前に控えている男。そんな彼(?)が出かけていく先は、セラピストのマーガレット(エリザベス・ペーニャ)のところ。男から女になるためのホルモン治療を何年か続けてきた彼の最後の望みは、「性別適合手術」すなわち、男性生殖器を除去して女性生殖器に「付け替える」手術を受けること。その手術のためには、セラピストの同意書などさまざまな書類が必要らしいが、マーガレットがそれに同意するためには、ブリーが肉体的にも精神的にもその手術に耐えられる状態であると判断することが必要。いよいよ手術の日程が決まり、その完了によって戸籍上も晴れて女性になることができると喜んでいたブリーだったが……。

タイのパタヤーにおける「男娼街」事情は……？

7月4日付朝日新聞は、タイの人気リゾート地パタヤーにおける「男娼街」事情を大きく報道した。このパタヤーは、私が2002年4月にタイ旅行をした時に訪れて、「オカマ」ちゃんのまちであることを実感したまち。記事によれば、1997年当時のチャワリット首相は、パタヤーを「悪の巣窟」と呼び、風俗店の取り締まりに乗り出し、2001年に就任したタクシン首相は「麻薬撲滅」を強力に推し進めた。またパタヤー市は、昨年「観光ナンバー1都市」キャンペーンを始めた。ところが、こうした努力に水を差す風評が消えず、パタヤーは「タイでは最大規模の男娼街」「児童買春の中心地」と指摘されている。この児童買春の被害者の多くは男児。この半年で約2800人のストリートチルドレンが保護されたとのことだ。記事の見出しは「『児童買春』追放が急務に」とされているが、さて……？

性同一性障害とは？

アメリカでは、「性同一性障害」(GID=Gender Identity Disorder、ジェンダー・アイデンティティ・ディサダー)に関する医学上、法律上、社会上、そして倫理上の議論が数多くある。日本でも、性同一性障害とは「生物学的には完全に正常であり、しかも自分の肉体がどちらの性に所属しているのかをはっきり認知していながら、その反面で、人格的には自分が別の性に属していると確信している状態」と定義されている(日本精神神経学会「性同一性障害に関する特別委員

会」による性同一性障害に関する答申と提言)。またネット情報によれば、「障害」とされる理由は、「その状態を本人が選択できない」ためとされている。映画の中でスピコウスキー博士がブリーに対し、「性同一性障害はアメリカ精神医学団体が発行した“精神障害の症例・統計マニュアル”のリストに載っている」と語っているとおりだ。これに対してダンカン・タッカー監督は、「私は性同一性障害が精神障害では絶対にはない、と信じています。トランスセクシャリティを避ける社会において、トランスセクシャルとして成長することは非常に大きな感情的な苦痛を引き起こすのが明らかだとしても」と反論しているが、さて、その是非は……？

トランスセクシャルとは？ トランスジェンダーとは？

トランスセクシャルには、MtF (Male to Female、身体的には男性であるが性自認が女性であるケース) と FtM (Female to Male、身体的には女性であるが性自認が男性であるケース) の2種類があり、これは性同一性障害よりも狭い概念。そして、トランスセクシャルは肉体的な性の問題を重視するもので、その問題を解決するためには医学的な助けを必要とするとのこと。他方、近年トランスジェンダー (TG) という概念が生まれてきたが、これは「社会的な性別を反対の性で生きる人々」を指すもの。そして、これは社会的な性の問題を重視したもので、その問題の解決のためには教育的な助けを必要とするとのこと。

電話の主は誰……？

ある日、テレフォン・アポインターの仕事をしているブリーにかかってきた電話は、NYの拘置所から。トビー (ケヴィン・ゼガーズ) と名乗る少年は、自分の父親を探すために電話をかけてきたとのこと。「そんな人ここにはいない」と電話を切ったものの、ブリーには思い当たるフシが……。それはかつて、自分が男性として1度だけ女性と肉体関係を持ったことがあること。あの時のあの行為により、あの相手の女性に子供が生まれていたというわけだ。そんなバカなと思いつつ、気持の動揺を隠せないブリーは、セラピストのマーガレットの問診で、マーガレットからその少年と面会し、気持の整理をつけるよう命じられた。「やっと手術の費用を捻出し、手術の日まで決まったのに、それを延期したら1年以

上待たなければならない」と訴えるブリーだったが、手術のためには「肉体的だけではなく、精神的にもノープロブレムでなければね」と、マーガレットは取り合ってくれなかった。

保釈金はたった1ドル……？

手術日まで1週間。その間にNYでトビーと何らかの話をつけて、またLAに戻らなければならない。そう考えたブリーは、NYの拘置所で係員にトビーの罪名を聞くと、それはちょっとした窃盗程度……。さらに話を聞くと、保釈金は何と1ドル……。そんなことが現実にあるのかどうか弁護士の私にもよくわからないが、ブリーはその1ドルを支払い、すぐに保釈されてきたトビーと会うと、トビーは「保釈してくれたのは教会関係の人」と早合点して、とりあえず感謝の言葉を。また、映画スター（といってもポルノ映画）を目指しているというだけあって、トビーはかなりの美形……。しかしドラッグをはじめ、トビーの生活はかなり荒れている様子。そこでとりあえずの援助をしなければと考え、なけなしの貯金から生活資金を出してやろうとしたが、トビーから「母は死んだ。継父はケンタッキーに住んでいる」と聞いたブリーにはいいアイデアが……。それは、ケンタッキーに住む継父の元にトビーを送り届けること。そこでブリーは中古車を購入して、2人してケンタッキーへ……。ここからこの映画は「ロード・ムービー」になるのだが、トビーはLAまで行き、LAで映画スターに向けて新しい生活を始めるつもりだから、同じ車に乗りながら2人の思惑は全く違っていた。さあ、これからどんなハプニングが飛び出すのだろうか……？

「ロード・ムービー」とは……？

「ロード・ムービー」とは、私が6月25日（日）の映画検定4級を受けるために勉強した『公式テキストブック』によれば、「ロードすなわち道路は移動の象徴であり、固定された生活基盤を持たない主人公が旅をすることによって人生観が変わったり、成長をとげる様を描く。広大な土地が広がるアメリカで発達したジャンルであり、やはりアメリカを舞台にした映画がもっとも似合うジャンルである」と定義されている（195頁参照）。その代表作として書かれているもので、

私が観た作品は、『イージー・ライダー』(69年)や『テルマ&ルイズ』(91年)など。そして私が直近に観た「ロード・ムービー」は、『サイドウェイ』(04年)(『シネマルーム7』212頁参照)と『モーターサイクル・ダイアリーズ』(04年)(『シネマルーム7』218頁参照)。この映画のテーマは「性同一性障害」だが、映画のジャンルとしてはロード・ムービーで、NYからLAまでのアメリカ大陸横断の旅と、その立ち寄り先でのいくつかの出来事を描いていくもの。その定義どおりのロード・ムービーといえるためには、この旅によってブリーとトビーの人生観が変わり、成長を遂げなければならないが、さてその変化や成長とは……？

ケンタッキーでは……？

ロード・ムービーの中で、2人が変化し、成長していくサマは、実際に映画を観て楽しんでもらいたいが、ここではそのポイントを5点だけ。第1のポイントは、ケンタッキーの継父の家に立ち寄った時の出来事。「継父の元へ帰るのは絶対イヤ」と言っていたトビーを、トビーが眠っている間にケンタッキーに向けて車を走らせたことによって、無事トビーと継父の「ご対面」となった。一見うれしそうにトビーを抱きしめようとした継父だったが、そこでトビーの示した反応は……？ 実はこの継父はとんでもない奴だったのだ……。

立ちションベンは禁物……？

何日にもわたる車で大陸大移動は、有り金の少ないブリーにとっては大変なこと。安いモーターに泊まることができればいい方だが、それでも2人同部屋。モーター代をケチれば野宿することに……。さらに、車の移動中必然的に生ずるのが生理的欲求。第2のポイントは、このおしっこにまつわる話。ある時、ブリーは車を止め、「ちょっとおしっこを」と外に出て用を足そうとしたが、疲れもあり、ちょっと油断したらしい……？ スカートをあげてしゃがみこんでと一見女性風のしぐさを見せたものの、やはり肉体的には男だから、つい立ちションベン風に……。それが、たまたまバックミラーを見ていたトビーの目に映ったものだから、それまでの苦労が水の泡……。このケツタイな教会のオバさんは、実はオバさんではなく男だったとわかってしまったから、さあ大変……？

ヒッピーの若者との出会いは……？

第3のポイントは、ヒッチハイクをしていたヒッピーの若者を車に乗せてやったことによって生まれたハプニング。このヒッピーは17歳のトビーと同世代の若者だったから2人はすぐに仲良くなり、一緒にドラッグをやったり、美しい湖の中で裸になって楽しんでいたが、そこで大変な事件が……？

さすがアメリカは広い……？

さすがアメリカ大陸は広いと実感させるのは、車を失った2人と原住民の血を引く中年男カルヴィン（グレアム・グリーン）との出会い。このいかにも素朴で、人の良さそうなカルヴィンは、どうもブリーに惚れたらしい……。したがって、第4のポイントは、そんな恋愛模様の展開だが……？

ブリーの両親の元では……？

第5のそして最大のポイントは、一文なしとなったブリーが仕方なくブリーの両親の家に寄り、手術費用を借用しようとしたことから生じるさまざまなハプニング。ブリーの父親マレー（パート・ヤング）はそれほどでもないが、母親のエリザベス（フィオヌラ・フラナガン）は、わが息子が女になって戻ってきたことにビックリ。さらに、妹のシドニー（キャリー・プレストン）の反応は……？

トビーはブリーの息子だから、実はトビーはマレーとエリザベスにとっては孫……。そういう裏事情を告知しないまま、すんなりと手術費用を借り受けて、手術日に間に合えばいいのだが、そんなブリーの思惑どおりコトは運ぶだろうか？ それでは映画としては面白くないはず……。すると、その後スクリーン上で展開されるドタバタ劇は……？ そこで誰がどのように傷つき、誰がどのように変化し、誰がどのように成長していくのだろうか……？ それがこの映画最大のポイントであり、見どころ。このように一見何でもないような出来事があるこれと連続していくが、それを観ている中で次第にあなたの目がやさしく温かい眼差しになっていくことが、きっとわかるはず……。すると、ひょっとして最後にはあなたも「トランスセクシャル万歳！」と叫んでいるかも……。 2006(平成18)年7月13日記